

女性史をとおして見れば

向井 承子

ノンフィクション作家

以前、子供が慢性の腎臓病で入院を幾度もくり返した時のことです。

小児病棟の面会時間は午後3時から7時まで。面会時間が近づくと、病棟と廊下とを仕切るドアの前に、母親を待ちわびる子供たちが集まって、みんなが時計をみつめています。午後3時、おかあさんたちが入ってきます。子どもたちはてんで腕にすがったり、抱きついたり。病棟はひとしきりにぎやかな歓声に包まれます。

でも、仕事を持っている母親は、その時間に間に合わせるのは容易なことではありません。ようやくたどりついたところには、面会時間終了のチャイムが鳴っていたりします。

私が書きたいのは、すでに20年も前の親子泣き別れ物語ではありません。その時の、病院の、ことに女性の冷たさが、いまも忘れられないのです。

「かわいそうに。子どもが入院しているのに。仕事なんて休むかやめればいいのに」

あなたたち看護婦だって働く女性同士なのに、と言いたい気持ちは山々でも、子どもは24時間をその場で過ごす人質の身。若い私は言い返すこともできませんでした。

さて、それから15年経って……。40代半ばの私がすい臓ガンの父のみとりをしていたころ、その時も同じ視線にさらされました。いや、それからさらに10年経って、いまは母のみとりの真っ最中ですが、医療現場が働く女性に向ける眼はあまり変わっていないような気がします。

人の生き死にかかわる時間なのに……。なぜ仕事をやめないの？ と問われれば、人のいのちや思い出とひきかえられる仕事などあるはずもないとしか応えようがありません。それどころか、生老

病死のような人生の大切な時間が施設に追いやられて、家族のかかわりが薄くなっているさびしい現実、私もとても気になることです。

でも、なぜ女だけが？ と問い返さなければならぬでしょう。女だけが追いつめられて、やさしいみとりなどができるはずがありません。それは病院の中で働く人たちも同じことです。女の仕事、という美徳の最後の砦は、いまや医療現場のように私には思えます。砦に追い詰められた女同士の修羅場も、あまりにも悲し過ぎます。

家族や社会の変化、そこに加えて医療技術の発達の結果、生老病死の性格は、これまでとは想像もつかないほどに変わっているのです。個人的なことが、個人や家族では担いきれない質と量のものに変化している。医療に従事する方は、むしろその変化をだれよりも早く察知できる立場にあるのですから、だれよりも先に、個々の生老病死の背景に目をやってほしいものです。

医療環境は、近代科学や思想の影響を受けて大きく変化しています。家族をとりまく状況も同じことです。ところが、医療現場が家族に向ける常識は、旧態依然としたモラルへの現実から逃避した甘えです。双方が自縄自縛の谷間に落ち込んでしまっても仕方ありません。

医療職にある女性たちは、ことに女性史への視点が欠けていると言っては言い過ぎでしょうか。その結果、互いを被害者意識に追いこんでしまいがちですが、それぞれを女性史の座標軸で眺めれば、医療の壁を越えて、女性たちがほんとうは同じ位置に置かれている様が見えてくるでしょう。歴史の視点に立ち、被害者意識を超えて——。新しい人間関係を生み出そうではありませんか。